

小児看護実践の基礎

子どもと家族を支える看護を学ぶ

ロールプレイ形式で
学びます



バイタルサイン測定

担当教員



安藤先生



安田先生

看護学講座

講師 安藤 晴美
特任教授 安田 恵美子

小児看護実践の基礎とは？

3年次後期に行われる臨地実習『子ども保健看護学実習』（小児病棟、小児科外来、重症心身障害児（者）施設、保育園など）の前提となる学修として、3年次前期（4月～7月）に開講されるのが『小児看護実践の基礎』です。少子化の中では、子どもと接する経験が限られている学生も少なくありません。そうした中でも、子どもへの関心が芽生え、「小児看護をしたい」と思えるような授業設計に工夫を凝らしています。

発達段階に応じた実践的な看護力を

この実践的な内容に入る前段階として、2年次後期（10月～1月）の『小児看護学概論』を通して、地域で生活する健康な子どもと家族の発達や健康課題について理解を深めていきます。これらの知識を土台とし、病気の子ども一人ひとりとその家族の発達段階に応じた実践的な看護力を身につけていくのが、この科目です。

『小児看護実践の基礎』では、健

康な子どもの発達段階の特徴を踏まえ、病気が子どもや家族に及ぼす影響を理解し、家族を一つの単位として捉えた看護を展開する力を養います。授業では、小児科医師による小児期に多く見られる疾患の講義のほか、看護としては発熱・脱水・呼吸困難といった症状や、急性期・慢性期・在宅・終末期などさまざまな状況における子どもと家族への支援方法を学びます。こうした学びをもとに、『看護過程』という系統的な看護の展開方法を、ペーパーパシエント（架空の患者）を用いた演習をします。

令和7年度は、小学校低学年の小児がん患者とその家族を想定した事例を取り上げ、身体的・心理社会的側面や家族の状況から看護上の問題を見出し、看護計画を立案しました。



与薬のロールプレイの様子

机上の学修だけでは得られない気づき

技術演習でもペーパーパシエントを用います。モデル人形を使った体温・血圧の測定などのバイタルサイン測定や、ロールプレイ形式による経口与薬（粉薬の飲ませ方）などの看護計画を立案し、学生は看護師役・子ども役・観察者役を交替で体験します。「実際にやってみないとわからなかったこと」や「子どもへの説明の難しさ」など、机上の学修だけでは得られない気づきが生まれています。これらの演習を通して約3か月間にわたり一人の架空の子どもに寄り添い続ける体験を積み重ねていきます。

また、令和6年度からチューター制度を導入し、4年次生が技術演習に参加しました。3年次生にとっては先輩の姿を通して未来を描く機会となり、4年次生にとっても自身の成長を再確認できる有意義な時間となりました。



物品の準備の様子